

大分大教育 久保加津代

はじめに 大正期を中心とするデモクラシー期には、洋風住宅の影響や衛生面の進歩に支えられ、都市「中流」階層の「主婦」たちに活発な住生活改善論議がみられるようになる。①家族本位の住居観にもとづいており、②女性の生活の改善に目を向けていることが一つの特徴である。当時の高等女学校家事科の教科書に、これらの点がどのようにとりあげられていたか、具体的に分析した。

方法 明治時代後半の家事科の教科書のうちから、後閑菊野・佐方鎮子の『家事教科書上・下』、塚本はま子の『実践家政学講義』を、大正時代～昭和時代のはじめにかけての家事科の教科書のうちから、大江スミの『応用家事精義』住居篇、『応用家事教科書上下』、『実用家事教科書』、『家事実習案内』と、井上秀子の『最新家事提要』、『家庭管理法』とをとりあげて、分析した。分析の視点は、①家族だんらんの空間の位置づけ、②主婦のための空間の有無と位置づけ、③家事労働空間の実態と改善姿勢、などである。

結果および考察 1. いずれの教科書も良妻賢母主義思想の強いものであった。2. 明治時代のおわりから大正時代の初期にかけての教科書は、「主婦の部屋」の記述や台所改善などについての詳細な記述がみられた。3. 大正時代中期以降の教科書は、生活の能率化・合理化の視点が強かった。「家族本位」という用語は使用されていたが、実際に教科書に掲載されている住宅の平面図には、南向きの「食堂」や「茶の間」は少なく、「主婦室」もみられなかった。「生活改善同盟會」の影響が考えられる。